論壇・オピニオン

多くの「心友」とともに

追悼 瀬戸内寂聴さん

「憲法9条京都の会」、弁護士

小笠原伸児

忘れられない 寂庵での笑顔

私の執務机の上に、2007年6月の京都新聞の切り抜きが今もある。瀬戸内寂聴さんが書かれたコラム「天眼」である。その文章の末尾にある「私の心友たちよ。死んではならぬ。生きて共に腕を組み、歴史の流れの堰になろう」の言葉が、いつも私に奮起を与える。寂聴さん、本当にありがとう。

寂聴さんの非戦反戦行動は有名だったので、京都の平和運動団体への参加をいつも希望していた。それが実現したのが、2008年6月29日に発足した「憲法9条京都の会」の代表世話人就任であった。

有馬頼底さん、安斎育郎さん、梅原猛さん、茂山千之丞さん、そして鶴見俊輔さんという、そうそうたる人たちとともに代表世話人のお一人になっていただいた。

初めて、嵯峨野の寂庵でお会いさせていただいた時の、ざっくばらんであっという間に打ち溶けられる人柄と節々ににじみ出てくる芯の強さの印象とが、今も鮮明に残っている。部屋の窓から寂庵の外景をお話ししていただいたときの寂聴さんの笑顔は忘れられない。

会の発足時のつどいでは、安斎さんをコーディネーターとして、鶴見さんと3人の豪華な鼎談をしていただいた。寂聴さんは「戦争は人殺しです」「殺してはいけないという戒律を守ることは命がけですよ」「やはり命をかけないと戦争反対はできません」「私は命をかけてやろうと思います」とスピーチされた。

牢屋に入れられても「戦争反対」

その強烈かつユーモアあふれるお話に感動した私たちは、09年5月3日の憲法集会での講演を依頼した。予定があり、無理をすれば5月2日なら可能、との返事をいただき、長年にわたって5月3日を恒例としていた憲法集会の日程を変更して寂聴さんにお願いした。

演題を「いのち 平和 寂聴のこころ」と提案したところ、寂聴さんは「では、いのち」と返答してくれた。詩文調に「いのち ゆたかに すこやかに みんなの願い」から始まる会設立時の呼びかけ文を想われたのかなと思った。そして、17年の寂聴さん最後の長編小説の題は「いのち」。何か深いつながりを感じた。

講演する瀬戸内寂聴さん

09年の「今、9条が輝くとき 生かそう憲法 守ろう9条 5・2憲法集会in京都」は、過去最大の4600人が参加した。寂聴さんは「人が集まることには驚きません」「天台寺での法話にもこれくらいの参加者」「もうちょっと多いかもね」と笑いを誘いながら「こんなにいい天気の日に、会場に来られて窮屈な目にあって、水も飴もないのにね」「この参加者に、戦争に反対できるんだという熱気を感じました」と言いながら講演を始められた。

そして、いつものように「戦争は、どんなに美辞麗句をつけても人殺し」「仏教の思想の根底は、殺すなかれ、殺させるなかれ」「私は、捕まっても、牢屋に入れられても、戦争反対を貫き通します」と語られた。

09年5月2日の憲法集会。過去最高の4600人が参加しました

繰り返してはならない歴史

紹介した「天眼」で、寂聴さんは「大正生まれの私と鶴見さんと梅原さんの3人は、もろに戦争を身をもって体験している」「昭和生まれの小田実さんと筑紫哲也さんも、幼時に受けた戦争の毒を忘れてはいない」「みんな戦争反対であり9条を断じて護らなければならないと思っている」「いざという時は腕を組み合う仲」「逢わなくてもお互い同じ考えだと信じあっている」と書き、そして、ガンと闘病中の4人を大切な仲間であると続けた後、冒頭の言葉を締めにされた。

決して繰り返させてはならない歴史がある。戦争国家への足音が響き始めた今、その流れがどんなに早く強かろうと、信じて頼りにし合う多くの「心友」とともに平和、いのちを大切にする社会をつくっていく。その決意をあらためて固めています。それが寂聴さんへの追悼の言葉としてもっともふさわしいと信じている。